

国際人を 目指して

県立大生セブ島研修

□下□

修了証書を受け取る一人一人の顔は充実感で満ちあふれていた。9月15日午後。8月下旬から始まった県立大経営学部国際経営学科のフィリピン・セブ島での語学研修は最終日を迎えた。修了式では講師からダンスや歌

「視野広がった」と実感

次のステップ

のプレゼントがあり、学生は英語のスピーチで感謝の気持ちを伝えた。

「今ではフィリピンが恋しく思える」。村田直人さん(18)は笑顔で3週間を振り返った。繰り返し英語で話さなければならなかった経験は初めてだった。弱点にも気が付き、成長も実感できた。

「もう一回参加したい?」。そう質問すると、苦笑いを浮かべた。その表情が研修のハードさを物語っていた。

◇ セブの語学研修と同じころ。シンガポールの日系企業では、学科2年の

セブの語学研修と同じころ。シンガポールの日系企業では、学科2年の



修了証書を手を笑顔を見せる学生たち。国際舞台を目指す取り組みは、始まったばかりだ
＝フィリピン・セブ島、イデア・アカデミア

松浦明日翔さん(19)がプレゼンテーションに励んでいた。「海外ビジネス研修」の一環で、来年から3年で必修となる。

ここでは英語は「話せて当たり前」。シンガポールの文化や教育制度など、調べたことを発表したり。各国の英語のなまりを聞き取るのは難しかった。「視野は広がった」と感じた。と同時に自らの国について、まだ十分に知らないことも分かった。

土台には昨年の語学研修があった。「セブで学んだ積極性が生かされていると思う。受け身では

何も始まらない。トライし続けてほしい」。松浦さんは後輩にエールを送る。

航空業界や通訳・翻訳、ファッション業界。学生に卒業後の進路を尋ねると、さまざまな将来の夢を聞かせてくれた。県立大の語学研修は始まったばかり。高いレベルを求めているが、岩重聡美学科長は「できない、ということを知るのも大事。どんな失敗している」と明かす。大学で海外研修を取り入れる動きは、これから盛んになるとみている。「かつて唯一世界に開かれていた長崎から、グローバルな人材を輩出したい。そんな思いを胸に全力疾走を続けていく」。岩重学科長はそう力を込めた。